

ディヤコニア



ベテスダの日・開会礼拝説教

食卓を囲む風景こそ

牧師 佐藤 千郎

また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しが出来ないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

ルカによる福音書14章12〜14節

ある日、主イエスはファリサイ派の議員の家の食事に招かれました。今から二千年前のことです。古代の社会では「社会的地位のある人から招待され、食事を共にする会食は『セレモニー』といわれるほど大きな意味を持っていた」とある

人類学者は指摘しています。

セレモニーと言うと今では葬儀を連想しますが、元の意味は「儀式」です。儀式では、しばしば、集団や共同体におけるその人の役割や地位の確認がなされ、また儀式はそれら役割・地位といったものの正当化にもつながっていました。従って、古代の会食では、誰が招かれているか、誰がどこに座るかといった事柄がとても重要な関心事であったことをうかがい知ることができます。

主イエスがファリサイ派の議員のひとつりから食事に招かれたという聖書の記事を読むとき、信仰理解をめぐって日頃から対立していたファリサイ派の議員の中にも、主イエスを、共同体の仲間、尊敬に値する人物として受け入れていた人がいたことが分かりますし、主イエスご自身も、立場を異にする人たちとの交わりを大切にされていた、その一面を知ることとも出来ます。

ですから、会食の席での主イエスのお話は、対立した雰囲気の中ではなく、ど

ちらかという、和やかな空気の中で、特に主イエスを招いてくれた主人に向かって、「会食という日常の事柄の中に込められた信仰的意味について」話されたことだったと、私には思えます。

皆で食卓を囲む会食は、主イエスにとっでは、神の国における食事のひな型でした。大切なことは、すべての人が無条件で招かれており、食卓から排除される人があつてはならないということでした。たとえば、貧しさを理由に食卓から排除される人があつてはならないのです。

主イエスは、主の祈りの中で「我らの日用の糧を 今日も与えたまえ」と祈ることを教えて下さいました。この祈りをもっとも真剣に祈れるのは、今日食べるパンもない、お腹を空かせている貧しい人にほかなりません。この祈りを教えて下さった主イエスは、この祈りと共にある人たちを孤立させることはありません。主の祈りのある所に食卓は生まれ、食卓と共にある祈りが主の祈りです。そして、真の食卓は、すべての人を招くその招き

によって、豊かさを増していきます。

皆が食卓を囲んだとき、主イエスは自分を招いてくれた人に「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」と言われました。

この言葉は、ホスピタリティの原点を示している言葉です。ホスピタリティとは、見知らぬ人（旅人）への愛、援助を意味していますが、この言葉が伝えようとしている内容は、人生の途中で出会った見知らぬ人を、自分とは関係のない人として見過ごしたり見放したりしない、と言うことでしょう。

ですから、主イエスは、様々な理由で会食から排除されている人たちを食卓に招くことが、真のホスピタリティであり、それはまた、セレモニーとしての会食を主催する主人にとっても、心得ておくべき最も大切な礼儀作法であるとお話しなされたのです。

この作法は、主イエスが語られた隣人愛とも深く結びついています。確かに、

飢えた人々たちへの食べ物提供そのこと自体も立派な愛の行いです。格差激しい現代社会においては、故無き貧しさに苦しんでいる人々のために必要な援助ですし、社会貢献のひとつでもあります。

しかし、共に生きる人間にとつての基本は、一つの食卓を共に囲むことであり、同じ食べ物をみんなで分け合うということから目をそらしてはいけません。何故なら、この基本に込められている思いが、その人を孤立させないという強い意志のあらわれだからです。

私たちの身近にある食卓が、神の国の食事のひな型になりうるのは、食卓に対する私たちの配慮もまた、ホスピタリティを伴ったものだからでしょう。今日これから食卓を囲む私たちが聞くべき言葉が、ここにあります。

私たちは今年もまた、ベテスタの日を覚え一つ所に集まっています。礼拝の後、いつものように食卓を囲み、懐かしい方々との再会の喜びを分かち合い、ベテスタ奉仕女母の家とのつながりのある人

たちの消息を報告し合い、更に、恩師や故人の思い出も語り合われることでしよう。ひさしぶりでお会いした方々と食卓を囲むことが出来ることは、本当に嬉しく喜ばしいことです。この喜びを分かち合いながら、改めてベテスタ奉仕女母の家の使命とこれまでの働きを心に留め、見知らぬ人を孤立させない食卓への招きを、これからも続けていく人々たちへの祈りを深めていくことは、『ベテスタの日』にふさわしいことではないでしょうか

かつては、見知らぬ者同士だった者たちが、今は主イエス・キリストにあつてひとつとされ、家族として食卓を囲んでいる風景、そこにベテスタ奉仕女母の家が描いている夢、祈りつつ目指している姿あると言えないでしょうか。

様々な人たちが一つの食卓を囲む風景、これより美しく、これ以上の平和な風景を、私たちが住むこの世界に、私は想像することは出来ません。

（ベテスタ奉仕女母の家理事、社会福祉法人日本医療伝道会衣笠病院チャプレン）

ディアコニアの原点⑦

いと高きところでは神に栄光、
地の上では御心になう人々に

平和があるように！

ルカ 2:14

馬槽に生れ、十字架に死したものに、
何の栄光がありえよう？ それは、まっ
たく蔽われた、暗い夜の出来事であり、
夜も安んじてまどろむことの赦されぬ貧
しい牧人たちが垣間見ることゆゆる
された、天上の秘密だったのである。
いわば、1000分の1秒ほど閃光が
きらめいたと言うくらいの見落とされ
やすい、信じがたい出来事だったので
あろう。

天軍が歌をうたったというのである。
その文句がこういうふういきこえたとい
うのである。しかも、それさえ解し
ようによってはどうともとれるもの—現
行邦訳のように（御心に適う人々に）、ラ
テン訳やミサ式文のように（善意の人々
に）—ましてや、各々の欲する処に従っ
て、まるで有っても無きが如くに取扱わ

れることに何の不思議もない。

けれども、自己を謙下のきわみに置いて、この讃歌に耳かたむけるものに、何とその光輝のあざやかなことか！ 汚れしらぬ天使どもが、すべて、ただ神おんひとりに栄光を帰している。彼等こそ、その汚れなき、その光輝を誇るべきであるのに……。ああ、この下界では、（わたしには私のタイムンがあります）などという、錆にも似たものがザラザラと、残らずの人間をつつんでいる。この下界

ツェーレンドルフの祈祷室にある

『慈悲の聖卓』より

ウィルヘルム・グロス 1948年作



では、この錆とあの錆と、その錆と錆との似具合が、腐敗と腐敗の重ねかたが、何の毒をもって何の毒を制するということだけが、一切であるのに……。

我々は、しばしば、その中で希望を見

失う。神や天使にきいたことをこの下界では言うべきではないのか——神や天使の言葉は、この地上では通用しないのか——神や天使の能力はこの泥濘のなかに及ばないのか——と。そして、何時しか神を疑い、疑わないまでも、あれはあれ、これはこれ——という二重の諦観におちいつてしまう。

そのときに閃光のように、天上の消息がこの下界に介入してくる。それも見る人にだけ見える、信じる人にだけ信じられるものであるが……。我々は神をみる事が出来ないとしても、天使を見る事ができる。イエスは（どんな小さな子供にも一人づつ守護天使がついている）と仰せられた。人間がいかに奸悪で多勢をたのんでも、天使の清さと多勢にはかなわないのである。そこにすでに勝利があり約束がある。失望したり諦観したりするならば、そのことがすでに大叛逆の開始なのである。

いと高きところでは、栄光が神に帰せられていくこと。それを疑わぬものは、又それを願い、いと高きところで

事が決せられてその通りに行動せねばならない。神に栄光を帰する、その方式のなかに、自己の一切の面目をなげうって立つもの——これを「天使」とよぶ。この天使が、いま必要なのである。少しばかりの仕事を自己の手柄に、できれば他人の功績まで自分の功績にかぞえたがり、ワタシに断らなかつた、ワタシは知りませんでした。ワタシを招かなかつたとわめきたて妨害する先生がたや女史がたをいま歴史は必要とするのではない。

さて、そうした目にも見えないものを頼りとして、目に見える現実の騒音にとりまかれるとき、神の存在と全能と栄光とは解っているとしてもかえってその二つの世界の緊張のゆえに心やすらかに生きたれないものがあるのではないか——という心配。これに、私は同情することを知らぬほど、のんきではない。

たしかに、ことごとくに心臓をしめつけられ、面を暗くし、頭をかかえることばかりである。そういう意味で、私たちは鈍感ではありえない。

しかし、この全能者を信じて進む一直線の行程に、そのゆえに微動だにも起ることがあるか？ 幾度も幾度も、おもしろいとおし、といなおし、しかも到着する結論は「否」である。この否という鮮やかな印を、我々は十字架に知る。そしてその予兆としての馬槽が、いま我らと共にある。これ、馬槽をみつめる我々が、いっしか涙せざるをえぬ理由である。嵐のなかで、動かぬ一点が与えられて

いるということ——これが、とりもなおさず平安である。この下界で、神を信じ、神の聖旨に従って神に栄光を帰しつつ、闘いつづけているものに、それだけ闘いは激しいが、それをさらに上廻る平安がある——と、わが愛する天使たちが、彼に従おうとする私たちをばげましてくれるのである。

「ディアコニ」10号

(深津 文雄)

アドベントのうた

ドイツ聖歌集 4 番

ふねはちかづき

Es kommt ein Schiff, geladen

1. Es kommt ein Schiff, ge = la = den bis an fei'n hōch = fen

Zealich (Dorifis)

Bord, trägt Got=tes Sohn doll Gna = den, des Va=ters e = wige Wort.

- 1 ふねはちかづきやまとつめる めぐみのしなはちちのことは
- 2 しずかにすべりいりくるふね はしらはみたましるしはあい
- 3 いかりおろされふねとまれば かみのみことほにくとなりぬ
- 4 うまやもくらきふるきむらに みどりごのきみあもりたもう
- 5 あわれみどりごきみだけば くなんのいばらわがみをさす
- 6 われきみともにしにたまいき とこよのいのちたえんかな

(深津 文雄 訳)

施設だより

聖書のお話

今井 直子

茂呂塾保育園の保育スタイルは、0歳児から5歳児までが一緒に過ごす時間が多く、昔から決まった時間に、決まった場所で礼拝を守るということをしていません。一日に一度、天気の良い日はお庭に、そうでない日は5歳児クラス、もみじ組に皆で集まり、皆で話をするときがあります。週の初めの月曜は賛美と祈りを持ち、公園へ行った時や特別なことがある時も、賛美をし、お祈りをするというスタイルを守ってきました。

アドベントと卒園の前の時期のみ、礼拝のような形式で降誕や聖書物語を聞くことはありましたが、その他の時は、聖書の話に触れることはほとんどありませんでした。そうした中、イエス様はどんな方に成長されたのか、聖書の中に書かれている色々な物語やたとえ話など子ども達に伝えていけたらという思いが、

クリスチャンの保育者の中にはありません。しかし、教会生活をしていない保育者からは、子どもにどのように話をしていったらよいのか分らないという意見も多く、なかなか実現できずにいました。

今から3年前、当時5歳児を担任した保育者が、イースターエッグを教会で貰ったことをきっかけに、子ども達とイースターエッグ作りをしたいと考えました。

せっかく作るのだから、イースターの出来事子ども達に伝えようとしたのですが、どのように伝えればよいのか迷い、当時、非常勤で近隣の教会の伝道師をしていたF保育者に相談しました。すると、F保育者は「わたしにやらせて貰えませんか」と申し出て下さり、イースターのお話をお願いすることにしました。

「わたしは復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。」

(ヨハネによる福音書11章25節)

「人間は誰でも嘘をついたり、意地悪をしたくなったり、友だちを嫌ったりす

るでしょう。こういう気持ちを罪ということ。罪を犯した人は神の国に入れない。」

しかし、神様は私たちが神の国に入れるようにと、その罪をイエス様が代わりに背負って十字架にかけられたの。イエス様は目には見えないけれど、みんなの心の中にいて下さること。寂しくなったら『助けて』『私はここにいるよ』と声を出して静かに祈りしてごらん」と、ゆっくり子ども達に話されました。

F先生「もし、皆が悪いことをして、代わりにお友だちが罰を受ける事になったらどう思う?」

子ども達「それはいやだよ」

F先生「はりつけの刑にした人達をイエス様はどう思ったのかな?」

子ども達「その人達もはりつけにされちゃえばいいって思った」「ポコポコにしちゃいたい」「イエス様はそんなこと思わないよ」等々。

先生の話に子ども達は真剣に耳を傾け素直な意見を言い始めました。

このことをきっかけに月に一度、年長

児だけ『聖書のお話』という時間を作り、お話を聞くことにしました。伝道師の保育者とクリスマスチャンの保育者で集まり、どのようなお話が良いか、聖書の箇所を決め、年間計画表を作り、実行していきましました。

昨年度は、もう1人非常勤保育士で、伝道師をされているI先生が参加され、伝道師の先生2人と担任、それにクリスマスチャンの保育士が加わり数名で分担し、さらに広げていきました。

職員間でも「聖書ものがたり」を知りたいという意見も出てきて、昨年度は園内研修でも「聖書ものがたり」を3グループに分かれ相談しながら、台本を作り発表し合うということもしました。教会生活をしていない職員の間でも「聖書ものがたり」の絵本を購入したり借りたりして、日々の保育の中で読み聞かせをするようになっていきました。

今年度は、2名の伝道師の非常勤保育士がそれぞれホスピス、東北被災地支援と伝道という、それぞれの志の道が拓か

れ、茂呂塾保育園を去ることになりましたが、せっかく始めたことなので、これまでの学びを元に、職員で聖書のお話をしたいこうということになりました。



回数も月に2回と増やし、年度の途中、年明けからは4歳児もお話を聞けるようにし、お話も職員みんなで担うこととしました。それに伴い教材として、聖書協会から出版されている「聖書ものがたり」の絵本も購入しました。

天地創造をはじめ、旧約・新約聖書の中からいくつかの物語やたとえ話の箇所を選び、イエス様の誕生や受難・復活の

お話を選び、年間予定を決めていきます。そして、「ここならお話ができる」という箇所を選んで担当を決め、時には退職した伝道師の保育者にメールをし、相談に乗ってもらったり、教会生活をしている保育者が教会から資料や紙芝居を借りて来たりしながら、それぞれ担当のお話について学び、準備をするようになりました。絵本をもとにペープサートを作ったり、パネルシアター、ちよつとした小道具を作ったりと、それぞれ工夫しながら子ども達にお話をしています。子ども達も、「今度は誰がお話をしてくれるの？」と毎回楽しみにする様子が見られています。

まだまだ始まったばかりですが、このことを通して、子ども達も職員も聖書に触れ、神様の思いを知る機会を与えられていく事を嬉しく思います。そして、卒園しても子ども達の中の何かしら残っていてくれたらと願っています。

(茂呂塾保育園 保育士)

永遠の安息

かにた婦人の村の

納骨室と合葬墓

8月17日は、かにた婦人の村の「召天者の日」です。会堂での礼拝の後、納骨室に下り、ラテン語で「レクイエム」を歌って、亡き友の永遠の安息を祈り、壁に飾られた写真を見ながら、その人の思い出を語り合います。



納骨棚の上に納められた新しい骨壺ふたつ
復活祭用の白い聖布の奥が合葬墓

またこの日は、創立者・深津文雄牧師の召天日で、改めて創立の精神に立ちかえり、創立者の意思を引き継ぐ大切な日として2003年より守られています。



納骨式を終えて

今年も、この召天者の日に、2月に亡くなったシュヴェスター操と7月に亡くなったKさんの納骨式を行いました。

納骨室に写真が飾られている亡き友の90人。この日、2人の方が加わった92人の友の名前を、シュヴェスター道が、ひとりひとり心をこめて読み上げるのを聞きながら、今はかにたを離れている職員、のシュヴェスターたちも、いろいろなことを思い出されたでしょう。

創立52年目の今では、納骨室の「もうひとつのかにた村」の人数の方が、現在の村人より多くなってしまいました。

「『おー、シュヴェスター操も、Kさんも来たのか。よくきたなー。』っておじいちゃんがいってるよね」と、納骨室には温かい会話が流れます。

実は、納骨室には、この召天者の日の前に、緊急に解決しなければならない問題がありました。それは、40ある納骨棚がいつぱいになってしまい、すでに6人の友の骨壺を、納骨棚の上に並べてあることなのです。

数年前、「合葬墓(がっそうぼ)」というものがあると知って、いろいろな資料を集めました。具体的なイメージがなかなか湧きません。ベテスタの理事をしておられる佐藤千郎牧師に相談にのっていただき、それなら神戸栄光教会の合葬墓を見にいってごらんさい、と教えていただきました。今年の2月、神戸の母の家ベテルに宿泊させていただいて、神戸栄光教会を訪れることができました。そして舞子墓苑にある神戸栄光教会の合葬墓を見せていただき、やっと合葬墓とはどういうものかを、具体的に知ることが



レクイエム「主よ彼らに永遠の安息を与えたまえ」の冒頭の部分

できました。
合葬墓にするには、まず市役所に設計図を添えた改築願を提出しなければならぬので、合葬墓の場所を決めなければなりません。外国の教会のように床下に合葬墓にして、床に美しい陶板をかぶせたいと思いましたが、素人造りの会堂の床下に手をつけるのは無謀なことがわかりました。やっと6月末、地元

の石材店にお願いして、納骨棚の正面にある4つの棚の間をくり抜いて、ひとつの合葬墓にすることができました。合葬墓の前面はコンクリートの板が貼つてあるので、今は復活祭用の白いオルタークロスがかけられています。ここには、茨の花を浮き上がらせた陶板がはめこまれる予定です。
深津文雄牧師が会堂のために描いた茨の花を原画として使い、五島列島の教会の天井にある茨の花のように、立体的なものを四隅に置けばバランスも良いよねと夢はふくらみます。
が、土を運ぶのもこねるのも、象嵌で、しかも立体的に茨を描くのも重労働。大きなもので乾燥にも時間がかかり、「召天者の日までには間に合いません」



納骨室入口と式次第
合葬墓の陶板のデザインを使用

と、陶芸班職員の手で天良さんに言われてしまいました。

さて、かいた婦人の村の初めての「合葬の式」は、佐藤牧師の司式のもと、召天者の日の前日、8月16日の午後、職員だけで行いました。66年に亡くなったMさんの合葬から始めて、12名の方の遺骨を合葬しました。佐藤牧師が日本人の習慣の話から始めてくださり、職員たちが



佐藤牧師と大沼理事長に制作中の陶板を見ていただく

ひとりひとりの骨壺をしっかりと胸に抱いて合葬墓の前に進み、遺骨を合葬墓に入れる姿は、祈りに満ちた、とてつもなく美しい光景でした。(塩川 成子)

2017年

ベテスタの日のついで

今年のベテスタの日は9月23日秋分の日に、茂呂塾保育園で持たれました。

奉仕女3名、祈りの友11名、法人関係者など47人の温かな集いでした。シュヴェスター陽子が出がけに具合悪く

なつて出席できず残念でしたが、遠く奈良から熊田てる子さん、神戸の母の家ベテルから鎌田クニ子さんがお出かけくださり、親しく交わりを持たれたことは、感謝です。

開会礼拝の説教は佐藤千郎牧師による「招待者の礼儀」。日頃、いろいろな境遇の方々を受け入れる立場の法人施設



のスタッフから、「心の奥に訴えかける、とても良いお話だった。」という声が聞かれました。

このお話は、「食卓を囲む風景こそ」と題して、今号の巻頭に掲載しました。



各年齢の担当保育士によるスライド「茂呂塾保育園の子どもたち」には、ぐんぐん成長していく子どもたちの姿が映し出され、シュヴェスター都代に、若かりし日に保母として茂呂塾で働いていた日々を、思い起こさせてくれました。

この日のために練習したトーンチャイムの演奏曲は「ロンドンデリーの歌」と「主われを愛す」の2曲。「茂呂塾のスタッフは忙しくてもチームワークが良いんです。」と副園長の高梨さん。

昼食には、「もろじゅくごはん」に載っている保育園独自のメニューを、松花堂弁当のように美しく盛り付けたもの。

作って下さった方の心が伝わって、一品づつ味わって美味しくいただきました。

交わりるときには、一人づつ近況報告を交えてのスピーチ。木田みな子さんの「なぜ祈りの友になったか」のお話とても貴重なお話で、今度ディアコニアに載せたいものです。

また、いずみ寮スタッフの伊比鮎子さんのお話は、前日に入所したAさんの重荷を共に担っている、苦悩に満ちた非常に重たいもので、「この最も小さい者のひとりになかったのは、私にしなかったのである。」という、イエスの厳しい声が聞こえてくる思いで聞きました。

年に一度ですが、こうして集まって語り合うことで、自分がベテスタの精神に連なっている一員なのだということを、改めて認識し、思いを新たにしている良い時間になっています。



「天高く馬肥ゆる秋」と伝えられ、自然が変化していくこの頃ですが、ベテスタの庭の草花は美しく咲き、夜は虫の声に聴き入り、秋の深まりを感じております。

昭和20年終戦後の数年間、私と弟は家族の生活を支えるために働きつめでした。

弟は去る9月10日(日)夜、入院先の病院で召されたとの知らせを聞き、生前会うことが出来なかったことを悔み、苦勞を共にした日々を思い出しています。 細井 陽子

今年の2月に天に召された山下操姉の遺骨は、去る8月17日かにた婦人の村の納骨堂に納められました。深津文雄先生ご夫妻や青木しのぶ姉もご一緒です。

村人の方々については、身寄りがなくなつて入所して来られた方が多いので、お骨も狭くなったので、一部合葬されたとのことです。

今は世間でも、お墓の問題は大きいようです。 眞山知恵子

平和への祈りは盡きじ終戦日

人の世の悲哀覚えぬ秋の蟬

無花果のジャム買い遠き日を恋ひぬ

吹く風に心ゆすられ秋ざくら

植木 道子

11月5日の午後、グループホーム・相

浜ガーデンの家族会がありました。桜庭

歌子姉や、かにたから入所している3名

の村人たちの日頃の生活の様子をビデオ

で見たり、お茶をいただいたりしながら、

親しくおしゃべりをする貴重なひと時を

過ごしました。歌子姉は右肩も随分回復

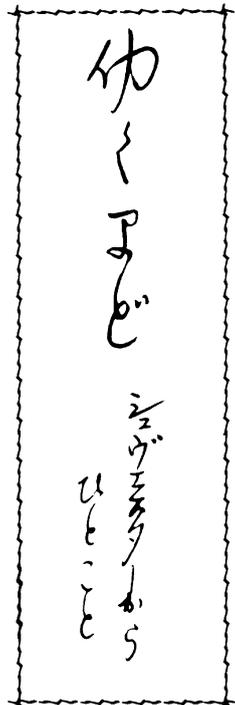
し、お箸もしっかり持てるようになって

大層元氣。洗濯物をたた

むなど、お手伝いに努め

ているとのことでした。

桜庭 歌子(天羽)



暑いくと云っている

うちに、もう秋に入つて

おりました。今年台風

の影響が少なく良かったと思ひますが、

被害に遭われた方々には、主の御守りを

祈ります。

9月23日のベテスタの日は、茂呂塾保

育園が会場になり、多くのお客様と共に

交わりのときを持ちました。

60数年前は、此処で幼児さんと過ごし

たことを思い出します。 小川 都代

賛助金・献金

ありがとうございますございました

(7～10月分)

明治学院中学校・東村山高等学校
八田満千子 西村多見子 吉村知子
広瀬公男 加藤大 藤沢ベテ
ル伝道所 友枝久美子 酒井忍
池田喜美子 佐藤千郎 牛込弘方
町教会 山ノ下恭二 余郷志津子
橋本展子 木田みな子 原田純子
村田充子 鈴木正男 (敬称略)

【審議】

第1号 かにた婦人の村建替えに関する事業計画
第2号 かにた婦人の村建替えに関する借入金について
第3号 かにた婦人の村建替えに関する入札について
いずれの議案についても、承認議決されました。

★「日々の聖句2018」

11月25日発刊予定

本部または、お近くのキリスト教書店
でお求めください。来年の「年の聖句」
は、「神は言われる。『渴いている者には、
わたしが、命の水の泉から価なしに飲ま
せよう。』(黙示録21章6節)です。

また、日々の聖句の各主日に指定され
ている伝統的なコラールは、「ドイツ聖
歌集」に載っています。「ドイツ聖歌集」
(深津文雄訳・編)は、かにた婦人の村へ
お申込みください。

TEL 0470-222-2280

✉ kanita1965@ybn.ne.jp

★ 大泉ベテル教会

森田進牧師は、御病気のため、9月末
日をもって退任されました。惜しまれま
すが、主の計り知れない御心と受け止め
たいと思います。先生の療養の日々が神
の御守りと励ましのうちにありますよう
にと祈っています。(ベテル教会HPより)

★ クリスマス献金のお願い

今年も、「クリスマス賛助金のおねが
い」を同封させていただきます。どうぞ
よろしくお願い申し上げます。

2017年11月15日発行

発行人 大沼 昭彦

編集責任者 村田 英彦

印刷所 (株)印刷センター

発行所 (年3回)

〒178-0061

東京都練馬区大泉学園町7-17-30

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家

TEL 03-3924-2238

<http://www.bethesda-dmh.org/>

振替口座001900-2-168164

★ 理事会

第215回理事会 9月23日

於 茂呂塾保育園

【報告】

第1号 かにた婦人の村建替え事業の
経過報告。

第2号 かにた問題検討委員会による

「かにた婦人の村建替え事業検討事項」

についての報告